

2023年4月16日（日）／説教者：國分美生

説教：「あなたが悲しいと私も悲しい」

聖書：ルカによる福音書7：11～17

イエスはある女性の息子が死んで、棺桶が運ばれていくところに遭遇します。この女性を見かけ、声をかけるまでの一連のことはあまりにもあっさりと書かれています。彼女が夫に先立たれた女性であったことは、注意して読む必要があります。貧しい庶民の女性が一人の人間として、自立して生きることの出来ない時代。父親か、そうでなければ夫の所有物としてしか生きる術がなかった時代。「彼女の一人息子が死んで」、とありますがおそらく、まだ何人かの娘が居たことでしょう。しかし、娘が何人居ても父権制社会の中で、家や財産を継ぐのは息子達。夫を失ったうえ頼みとする息子を失った女性は、愛する身内を無くしたと言うだけではなく、この世に生きる場所を失った者としてここに描かれています。イエスは女性をみて、憐れに思い「もう泣かなくともよい」と声をかけられました。原典に忠実に訳せば、イエスは彼女に対してはらわたがちぎれる想いに駆られ、「泣くのはおよしなさい」と彼女に言った、となります。沖縄にも同じ意味の言葉があります。「ちむぐりさ」です。

イエスもやもめの悲しみを自分のことのように苦しまれて、そしてどうしたかという、その女性の苦しみを取り除くために全身全霊をかたむけられました。イエスが棺に手をかけて、命じると、死者が置きあがったことが描かれています。ここは死者をよみがえらせた奇跡ではなく、16節の民衆の反応に注目すべきでしょう。人々は神に畏敬の念を抱き、神を賛美しました。そして「神はその民を顧みられた」という言葉が出るほど、人々はこの出来事に心揺さぶられたのです。絶望の淵に追いやられた者を顧みられる神は、決して上から目線ではなく、同じように、一緒に苦しんでくださる神であるという事実は、私たちをどれほど励ますでしょうか。そして、イエスに従っていく私たちも、望むらくはどのように深く痛みを共有し、その体験によってこの社会の変革と平和づくりに押し出されていきたいと思えます。日本にはない「ちむぐりさ」という言葉、それは聖書の「スプランクニゾマイ=はらわたがちぎれるおもい」。そのことを思い返すたび、イエス・キリストがこの沖縄で私たちと共にいてくださることを強く感じます。そしてイースターは、そのようなイエス・キリストがこの世の暗闇に勝つ、希望そのものであることを、改めて胸に刻む日です。（國分美生）